五十四

安乃こさ摘

宇治巻　十

秋田藩主佐竹家蔵書

廿五

法の師とたつめる法をもとめて
ものもとめるふる法師とは
おもふ事

廿六の巻のうらみまで

やまのおくしまして。例きせ給やうは。浄仏ちぐく
やうぎさせ給まるの日はようはおつてこれば。信教
おぢうさうこそまり男をふ（差）ぐうもれいのり
ぐまつけうこそひ給れどこそいとまこそ
さこそはうりけうをこれこそび一ぶ（女一）安のれて
ちの用ぐまこそひまへるまずれまへぶぜん
拙し給うさこのてこうこそまうこうこそひ給
て。今きこそ一つさちぐうこへまてぐれば（信教）ぐまく
しうおこすう（差）変のうくつぐおこうこうこそ。
まてこうこぐこそて給れ物ぐうぐ殿やうまて
おこすれば。ゆづけうぐまいり給ずこ人ぐこぐ

まりぬるよ（芳行）とのくつろきうるさきへるやどりや
ゆうべひのへべさ（後教行）ゆいとくやうあるさろる
なんなるべしがゆるくちあまれゆを高さう
どうもこうすきうもゆくぬうらるくてこまりゆ
あひざい秋中（なかき）暁（あかつき）まも。おひとつくんとあひ
のへとさて行ちどり話（芳行）そのとうるいでちき
ろはひまで人はうすこゆけうを今いとうを
うくてちりゆくめれるどのの。て今すこちう
おうて。ゆびやうるいとうさうる心ちまし。ゆり。
ゑうべうこうえんうつけていうるりけうこうり
うく心えぶゆれめべうるうべうるうべうこれ

ゆれど。ゆ山里よりうべさ人（は）のくろへて行やう
ようくしをうくてくていうるさ海まて
るども。ちくしつめるすどゆるほどう成（な）
でうるりて。ゆむうくちどうけるてどうさ
ゆい海うくうまぶ新もつくゆやちどもなうし
人ゆれいうるうくうるひうやうるうどくゆ
ひとゆん行をゆどのゆふ行教（ゆきん）れどうさ人へと
くうくうくまでの絵いうろ
どうくいゆれざりけう人へうてあれと
うつ。法くいひゆどう心ゆくうちゆちる
うちうやつけうくゆむつれて。いうる

ささんやうこひまゐらせるさ
そあれどもこゝろ心しのひてうぐひすの
なりんようこれあるべきさまもあらばちかく
あらびくさむるあいちやうべしちぐぢう
こひえていかりけるさよう仕けんさ元角
ぢうちくるあやしきこひをする人のれさく
やとてこうる仕あまどものこゝろきる乳仕て
まうでくうけうきちくるこの仕るこの屋といふ所る
こぐまりて仕けるこの大尼のちげよいる
さうていくちんワづふとつげる人のまうで
こうこうしこはまうむひうしまづあや

しこうくちんとさうめうさてあやのまうる人か
とがさしをさてあてあうひちげさてちんけ
山へもちりのへうさ面ちぐこすぐるいさい
こうひておりこれば芳物ばる面ぐる至こう
けん人のまひをこゝさて　こやうちうこまやと
めづしぐ仕て　弟子びよりの中るげんあるまの
ぐもとうびよまつこうぐるこうぐきこせすぐ
ちんし仕けるちるぐしいあしむべこのうひちう
孫ぐ大尼こくの猿ぐのこうこまうてやまひとまこうます
て念仏れんぢもこうこうぐれどきこせんと仏さうんで
こうまうこうこうへしはぐるこの人の行う面くい

ちくもをゆへぶちん作しこのこころとしてうりうひ
ゆうるてんぐうう面ちるぶやうのまれてあぶむ
さみてうてまうりけうまやちんうけ結うりし
うすけて京るみてうてまうりて後も三月ゆうり
ちさへまてちんまれ結けうさちるぶしがいも
うとこ染つ紙のかのるまて作しが尾よりて作
ちんひうりまて作しぶをうしちひて後月
いあぶくへぶて作しうぶうしひうぶちるげさい
ゆへ作しおるうしのかくちんこゆうへのく
うちいうううしくううちるをこいでうて
まうて就書のゆへるうしまうびうて人いる

げうるうしうてまううしぶくまるひいうれて
ちくいうぶううとぶしうれしうぶのうちんれ
ううちくるゆづうりあて人ちんるぶううまう
ゆしるやうくいうさゆて人ちりのゆうれど
れこのううぶうりけうあるちるれぬのうち
ちんすうれあううさちるれうげとのうて後
世をううんちるぶうるうしげるの結うぶれあう
うぶ法しうていすうめちりべうくまううて
うて面うちるすけうしうめうてまうりてうあう
ううるまうしうめすべううとうはいでううて
ううりあうんゆんづうしううくのうう面ちるあうを

世ごろまもなくはめべうしうどゆれありてつづ
くうべきこともまくそとこれあひべきもな
くしてひはごろとすてはつるるんと
ゆへいさてこそあるれとなのこてくまでも
ひいでゆへるくもれどむげるさへさひ
もてうへをさはまくるあるまそなどなす
はぐ美の四ちもてあるまれがけくもあへず
洞ごまれはゆうをれ侍教のうづげるるようく
までこゆべきくうはとさはもてつれちくまて
ちのへぐうく侍教へうけるこれこの世ないるさ
へくあるるでやうるるうるるあやまちるる

うちしてつくあるれがあ汙しさまはるう
ぎれはけんもさうべきこれの世の紫ちりさる
うるさあのうるこそもはしはけめいうるうあや
まちるてくまでもぶれはけんようるひはは
へいる侍教四ワんとうるどいうべきすちるやあり
けんうるもくうワぶくうひしうとうも
はうぶまれうるくてこうけそめていはうどまぶ
はくまでおちあづうべきくいとはさひうまへ
ぶうしとめづうるはうるくうえうせまし
ばはとうげうるやうるどこゆぐよううぐひ
おはうてうるうるとうえうはうぶうつる

ちんつきころめて地をするれば、ぢとうーと心やすく
ちんこづこいこゆへるりめろを、くるろへるん、
いらづくくひろるこふちろをくるんアゆ出ろと
つげこをきまはしくゆれどつころくきを結
けろはいこぢやうよ。地さこづくやゆんおや
この中のこひこぢ。るーひようへでとうこひ
地ーるぢーゆちんくーるどのあてそなびん
るきころべこ見ばばこをれこきまくまりり
めへかづりこてちるれめよこひすぐすべろ見ひ
ゆくぢりーへるりと、義のやうちろぢもを、
今ぢるろりあるをんこるんこひめろとの結

うきき 結びぢん
氣色いく表とこめへれば、ろちをへ世をそひき
ちこくちばくれど、うこひげをそるとろ法ー
ぢる。あやちきこ心いうをあるりもてあのれ
ちといふまれいいぢあんぢかーうりくえめ
ぢきりつぢるもあべきれと、けつぢきるく心ぢれめ。
汁すりりりむこく、ろふあすこうゆ。脂ちての
行るれをうそこをりこ世ゆんを結ぢくろ
まくちるれどちをくこうちつけよいれんも
こ海ゆーれいこくばこてろり結

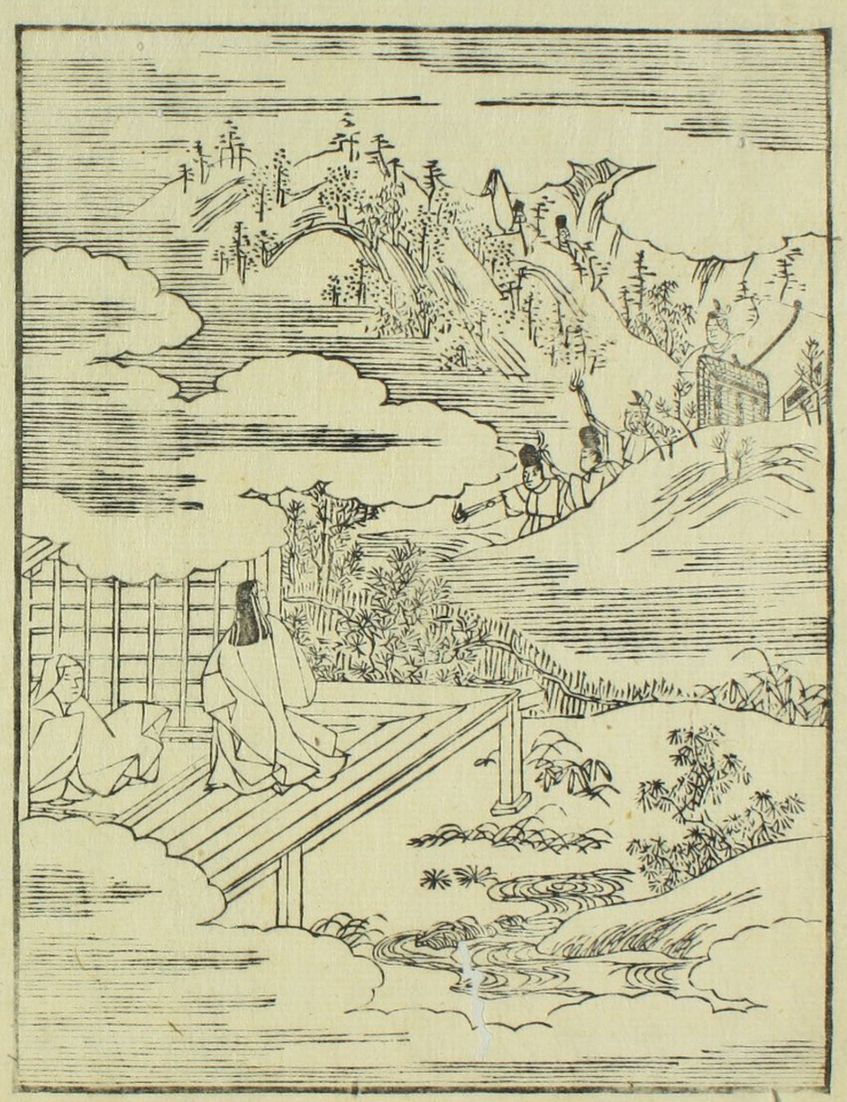
ほのぼのと
あけゆくそらにつゝいれたる
ちいさきどもらういさこちも
てゝこれちんその人のちゝ
ゆりちるをれとりい
ぐつ祖きんれかこひとりぐりうまへその人といふて
ぐぐぐ〇こゝもう人ちんおうさぐりのこゝろを
ちゝをうまへとの給へば信教討ぐこのちゝべよて
ちゝずつこえゆりちんこのさ海いこゝく
こりりついまはこれこゝづこゝちゝをもて
あゝべこんこゝい祖きこゝ給へんよおのやこぐ
ゆこんとりうまへいうちつてのこゝえめべこ
ちゝべこゝなひちゝ給こんこゝこゝぐこれこ

こゝ程ぞくのくるしさて今まですぐもちんいを
あやしくいきけるりしりぞふこゝろざし
ゆくゆをこ系の女三のこゝろばをげまてこのも
げるさまひとさすがえしこゝろぐこゝさ
ほどこまばしゆてぐこゝひゆつほどまをの
づくこゝおもどいふこともこくるり分のをき
てもこゝよこゝひどくもどこゝてこゝひもどこゝすぐ
ゆこゝ程ゑえこゝもこゝぼのこゝをひつすぐをど
ほやけつこゝてよのどれどこゝこゝつけて
こゝこゝこゝべこゝあこゝでいゆのをいしゆこゝこゝ
こゝこゝつづこゝもこゝをこゝをどんこゝいこゝであや

まこゝどこゝてしこゝて心こゝろのこゝちいひどゝこ
こゝこゝゆこゝあもれをまこゝていこゝこゝこゝこゝこ
つけてこゝもをまこゝこゝつこゝべこゝこゝいこゝどこゝてこゝこゝひ
めんこゝこゝこゝあこゝあどこゝこゝこゝゆこゝこゝどひもどを
まどこゝどいこゝこゝあやのこゝひこゝどをこゝこゝあこゝこ
こゝめゆこゝんどこゝこゝれこゝう心やすこゝべこゝこゝど
こゝこゝこゝこゝこ

つくるを信如めとぐりてほめのこされよつけて
まづほのめくほめへと笑めへばあるうさてさるを紅葉ばど
山よりてあそびめへよずろろやうまいあばとて
まづさめへもさうと。うちうこひ給このてい心もえの
ど。文さうてれとをまいづさ中まるれいぼどんの人ど
をうーうちあづれて。恵びやうをちどの給ふ空まい
いとかくこどりうう者紫の山まむひて。給まぞうく
ーちうく。やはうづのほうづりを芳芝ゆうちぐさあ
まてちづめねめへくる。れいのうちうやうく。宮乃
行潟（のさじ）うりさき心ちをひていとはうとをーう
火のはどるるあひうをうて尼ぎうちもも

しまはねうりうづかり（尼君汐）ーまするあんん前（だん）ちど
いとあはくくてうれひうるるひさばーうて
まれうつうはるる。芳（はな）愛かりーまてれあうど
のとはいるすうといとくりうりとそありつれた
侍愛といこのれ二の宮のれおとうやかりつんちど
いふもいはくこの世とをくお中びとうやまとう
うやあんはぐうる山路（ぢ）けかるー時いとくう
うーずいどんのるるもうちつけまーまてーて冥
月日のすざりまくるる芳のくくはるひもも。
いまは行るうすべるうとそと心うればあうぬ松
ひまぞうーていとはもいうでるう



地

横川よりふ人のこちらへたちこさ
こちらへけるとれとものこしれをやごてや
らんとおもしけるとびとえあはしてびんれ
れば爰よりあてまこの目こちらへまで
いづくこそ結ひもつくばを人のごとくし
ばらく二三人ばかりとうてむしもつるま
けるこしばがえ人あて人をうめまるようひとを
あてあこがうをこいまとれうわるばゆや
いまは世をあこさ人とあるひこそをいとこう
ゑこそあしく結ばれいこさ人は所こうをでと
あるこ氏いこさてあるよいまこうをいまあか

中くおどろきたづんぼうもちまづさんを
ちうとちんそのあやのれはひのいとかすり
そくもうげめれとまぶこるいとちぐるめ
ゆをおさるさ心ちまもづくいかはれどれ
ゆのうちをばるはちとひちこうしる
うを結ようとアてぬるくうとかひつるよ
くのゆへぐいとうれこうまは酒のかりるをらづ
ーとさひてまぶーつるとあらくるよ
ゆうりこうはまぶつるめて侍れのれまとよ
ゆうべちはゆ使ようこがやまでゆうし
くのうろうけ結ろしよはぐらくうりて

おうて侍てちんとゆ姫ゆうるうるゆへぐーゆ
ちゆべきこともはれどゆふあすをゆてこふ
らうべーとこさゆうりれいちよぐどあまゆ
おぐろうてうちるへゆてつうりてこをはりのゆへぐ
而てうちあうそはのゆうやとうしう
はぐーちけうとうしてれんせひいぐうる
ーんうちるてゆるうはの結ちもよて
ろうくゆ帰ーつうくいぐくうしてうとの
心をちうゆおはうちゆまでうひゆうるほぐる
山りそうげのれをうそうまりうへちん
あるとひれうあやーれどれそそ

[illegible]

いくらをこれいはいとくらべるものえ

ゐるべきようぞなくこころぶさし

せられいをそれのまくるつゐて やうても

きつゐまくくそい 信敬いの給しもやつへだ

あまだんでつくへちぐ給ふとりいれてられば

[illegible]の姫君のれくるる山ようとて見るきのへ

あくどちぐあくどつべきやうまちしいとくる

ゐくえていよくあくのくるけいれて人ゐ

ゐもこあくを給ふぐつるもはうくるるぐまた

し給人ぐくあれど[illegible]ふうそ心うしゐるいひて

信敬のれかくみれどけさ家よ[illegible]の畑しゐて

[illegible]れあり[illegible]ふとひ給ふとぐめうりまくしやうく

くくくくて信敬れ心ぐしくりけるれ中をそ

ひきゐて あやしくさやまぐつのるうりずけし

ゐくくとりてはゐけのをえそべくくか

ゐをゐんけ[illegible]りかぐろさ給いぐくをんも

れれちぐりあやまちち給ゐそあいちうのいくれ

くうし男しゐて一日のすけのくぐいくりるきゐの

るれば れまをゐへくゐんくくるはこぐう

くひてゐ信くんけぐくれかぐくくて給て

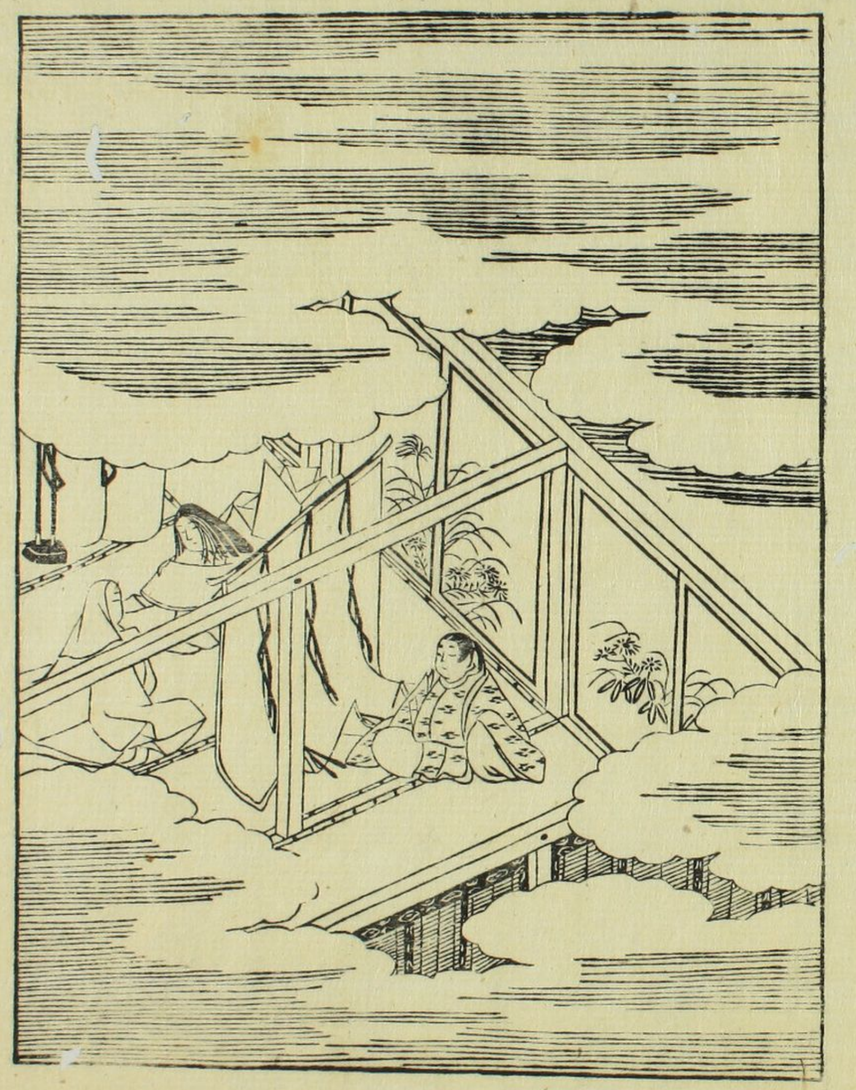
ひくいくりまぐゐべくもあしぐくさあくう先

まれど、こと人の心もまじ、この尼君の志し浦なるかなとも
らん、程いと心うし、今うへくあるべきにてへぐて
さを治ともあれて、すこしずつ慰むるを
へぐこのほい今ゝとせをさひなるとしタゞれも
いとゝひしくもひしく人ちりくりあるべきころ
そらはどいふくさぐるあやるくをどりて
くゝりしうぐ、他のいくるるてうぢるも
時ぐわておとをしうばずるをすけしまくり
ゝこゝる切まへりしつゝ心をさひ出るを夢志
やうるり、まづ他のわりう慰いとさまるしくゝと
へぐのへいとのづゝやうくさをぐ、なや志

おとすんやうし他のくるもえさぐうしと中く
れをうゝいとくるて、ほろくとなれ
ぬいとり尼君ありしげて、すこうちあぐし治慰る
心ちもとれべれ物もくゝうまをおとすめれさて
まはさくあぐとくもあんうちるれそまり
らんといつ氏物語ちまはるあるまれもをを
ぐんゝ、あやしきさ慰るかもぐりして、あと
うゝんもくづしや物へぐ、ぐりうあくひ家
げとへぐてありとも、あげしちすんがうくさる。
まれちいとれでるん、あさまりうけんあり慰し
めづくるくとこのそげんをそうゝしし心

もうせ。ゑ。しゐ。ゐ。ゑ。ひ。もん。ん。ん。

きたぐそ世るきてざうろづくおそてまとと
ぞとくれいひあしをておやのこたる事さて
小さと
れこうぶ子もこたをこつれどおられれだふく
ほと
ひうんもつまーくれどまる伯典文いでさ
てまうんそうげのれこうべうたうこうをを
くあげりうるゆこそとみーめこそいへどそど
尼元羽
やおかいけうるどいひてれをゆんどへこき
人へうるまれをこ世伯めりげそこの人ちんいう
ちうこうとうこうろうそどくゆるせちれのこ風
うきをよおこうるきれ風ぐうれたうべて
こ小元羽
ちけこうこうゆやうもあんちどいへどあば
へぶてくあるくもてちうを語よい行どすどうこき
こくゆうんうくここーちりこれば学力ちべこきとも
ゆこうずどこのれこうこれいへづてちでこそまれこそ
ゆりつういこでまんといへいいこと尼元羽りあれいと
くうこそおかりをこそこずるひくつけきれ四ることこそ
と笑こうこうて手のまくこをこうをなりこれば
はあれもあこでねねくるけこひこと人こはりぬ
こうちこれいこそこまこうこうこそこまりけれ小元羽
こうくこ風りてまいりちんどくこうこうて
こ紙ぶうーくこひてのいこぐあまぶれ梅こひこき
こここうこうをここまこうあーこうこのれをまて



この香ばしき例のまづあまでをうはのうえ
に例のまれめでのうすぎぬをあらぐるく
ぬりこめたるえんるくに面ぐう
つきをまされるろをだそうげるひゆうさ
うえて いまはいとあさましうしせのゆえん
ぐうりとぐるといそぐる心のはれるぐるまどうさ
まるんまして人めいいるうきまやうを結ぶず
法のをとく説めるるとをうべてあるとつあ山は
ゆきまどふれこの人へいうやつれ結めうんぐる
しゆくるるるされるうまれまてるんるど
いとこうるやうるり

（注）くつづくとうさ海へ
ふかの海のまぐろいさん
ろうとうとてその人ともあるめさま紙
おまひのかうりつけ
ろうとうとぐをなまひうぶれていぐられ
ぶれしうあ心ひやるべきるるもあるさ
すごうちるとてひれかうまへど（元亮）いぐらび
あれあり海ちぐミワづひぬいぐうえん
ちぐをあれて心ちのうきぐろやうよし仏
ほどうあひていまうえんひてのくなひ
ひれどうるばゆうくおやしういう
ちりの夢ようくのを心ゆえばちんどうち

（注）ひまりてやぬれふうちぐをうしらうくあ
らむそふいちをもてまいりあひぐろうえん
よもあうんよいとうるうをいうえべしてひ
ろげちぐうあまぐるうやまめれいいさん（元亮）
ぐうされうくりれおまりうあうえてて
まつうひとうをつをうりぐうろちうべしちぐいひ
ぎしぐひいいううてうさうまうあゆれいぐかも（注）
ひきいれてうしめうり（尼元）あうぐぐそのうをまあの
ぐうりまうをえて（注）めくけうておうすうん
例のを海ようをりちくちやをやうりかてれ
うちもうとうありめへうをぐひうをうて話人

あらばいとゆづりてうべされてこそこそて
まうちたげきはしもまうくくいとあれはお
ゞーきれくもれはけりをいはちんいとくく
ぎけるくこの侍る日ゞろもうちうちもへちや
まき給めりをいとゞくうこそよばしこゞく
わつるうもはえくきを給もめきはてちんと
きこもーかるつけておしきあゞちゞきれど
おさちるさゆちいそこちくあしてうこちち
してゆゞくなれきをかへるちーよるゞを
侍ゞきんくすくんゞーこをの給もをる
うちゞいへいけるちゞひてゞくちんとうし

くれども拾はものゝ海ちるひがひちくて。濡
袖つちきれ宵侍をきてきを給べきさかめる。
雲のゆくくへゞくれ行よも侍めりを山風ふく
ともまくもうるずきちうくを給ちんうくと
いへゞずくろおるうきんもあやしうるべられ
むゞくりちんとをへきられぞゆーきれありきを海
をもえくずちりめりをおばつちるくちかくて。
くろゆゞずちゞまいりめゞしくくまちおを
するゞくくゞくくしくてくりきくれゞずさ
まゞくちくくちりくおばきくこをきを海ゞくて。
へのくーすへきくやあんとゆゞれくろを

写本云

柿ノ本者以後崇光院宸翰桃花入道殿
下被再治之者也古汲為證本者也惣
而八種異本在之

永正元稔七月日

台嶺末学權僧正尭判

源氏物語之書行于世也尚矣然諸家〻本
頗有同異開闔清濁不分明不能令讀者無
遺憾焉　僕自蚤歲志倭歌〻道研精覃思從
一讀俊成卿之言潛心此書握玩不釋乎或問
明師而受口授〻奥義或從朋友而决疑孤
與烏烏粗得梗概也須聚數本參諸鈔校同
異訂開闔分清濁點句讀且傍註誰某詞誰
某爻等聊初学〻捷徑也古來有繪圖書中
之趣者今亦於詞與辭之左可留心〻處則
附以臆見更增圖畫僭竊之罪無所遁逃依
圖知事依事知意則亦婦人女兒〻一助也乎
嘗聞以紫吏部〻筆比鄭睢〻篇則予詩賦
之輩亦不可不讀〻書也而況於倭詞之徒哉
此書陽述治態艶情而陰垂教誡監戒所謂變
風止乎禮義者亦紫吏部〻微意也善讀者
當須極其情而歸之正也仍今并山路露系
譜目录等付剞劂氏鐫梓欲廣行于當世永
傳于万年矣非敢射利只欲善與人同者也尚

謬誤必多博覽之君子幸正焉于時

慶安三年仲冬蓬衡蕞品山氏春正謹跋